

その 51

そして今、万葉を世界に（その 1）



この「万葉集ナウ」は、スタートしてから約 1 年半、50 回を超えたところでエンディングに入ることにしたい。そもそも、ドキュメンタリーを志してきたテレビ・プロデューサーが、何の因果か万葉集の番組を制作することになり、思いがけず万葉集に一目惚れして以来、自称「万葉集宣伝係」としてささやかながら活動を続けてきた。そして、万葉集のみならず言葉についても門外漢の私が、無謀にも「地球ことば村」のサイトに、「万葉～古から今へ」、愛称「万葉集ナウ」を連載させてもらい、まさにナウな視点で、これまでとは畑違いの「万葉集」という畑を耕してきた。ところが、その畑、必ずしも「畑違い」ではなく、むしろこれまでと「同じ畑」を掘り起こしていることに気がついたのである。つまり、これまで何度か書いてきたように、万葉集は単なる歌集ではなく、古代の人々の「心と暮らし」のドキュメントであることを知ったからだ。そこで、万葉集という「古代の畑」を掘り起こし、そこから新しい種や作物を収穫して、これまで私が志してきた今日的なドキュメンタリーとして出荷する、「万葉集ナウ」は、そんな千年の時を超えた農作業だったような気がする。

そして、この自称「万葉集宣伝係」は、「万葉集ナウ」の終了とともに、その役目を終える潮時かなとも思う。「日めくり万葉集」を担当してから 10 年ちょっと、短い期間ではあったが、万葉集の門外漢としてはやり尽くした感が正直ある。これまでは、時の勢いで、万葉集を宣伝することに務めてきたが、これからの余生は、万葉集を楽しむことに専心したい。本来はその順番が逆で、楽しんでからそれを務めるのが筋だろうが、これも時の流れだろう。ちなみに、万葉の時代の「時」は、現代の「時」とは少しその意が異なるようだが……

万葉集の宣伝係を降りるにあたって、心残り、そう、やり残したことが、2 つある。

その 1 つが、東京にいながら、万葉集を書くことのストレス、つまり、「万葉集ナウ」を連載しながら、歌に詠まれた万葉のふるさと、奈良という地を知らないことである。もちろん、「日めくり万葉集」の取材や交渉で、これまで何回かかつての奈良の都を訪れたことはある。しかし、それは万葉集と付き合い始めたばかりの時期で、万葉歌とそれが詠まれた地とが結びつくまでには至らなかった。とりわけ、その後私の最も親しい万葉の友人

(?)となる万葉ファンタジスタ大伴家持が、かつて多くの歌を詠じた地、つまり、そのバックグラウンドをイメージすることがなかなかできなかった。

越中守として家持が多くの歌を詠んだ高岡では、2年続けて万葉劇を公演し、万葉集全20巻朗読の会にも参加し、その地で家持の絶唱を朗読した。因幡守として、家持が万葉集最後の歌「いや重いけよごと」1首を詠んだ鳥取でも、家持の舞台「いや重いけよごと」を公演したことから、それぞれの地に立ち、それなりに家持のイメージを共有することができた。しかし、家持が最も多くの歌を詠んだ奈良の地、とりわけ、家持の大納言邸があった佐保や佐保川を知らない。

そこで、いつかその大納言邸の跡に立ちたい、と思っていたところ、その機会がやってきた。前述したように高岡で2回、鳥取で1回、家持の舞台を公演したが、その3回とも、見事な万葉衣装を担当してくれた盟友山口千代子さんとその仲間が、これまでの集大成ともいべき万葉衣装の展覧「甦る万葉衣装展」を、6月18日から7月8日まで、奈良は明日香村にある奈良県立万葉文化館で開催するという。そこで、山口さんのギャラリートークに合わせて、久しぶりに奈良を訪ねることにしたのである。高岡公演で家持役を演じた俳優石黒賢さんや鳥取公演で演じた和泉元彌さん他多くの役者さんたちが着用した、見る人を万葉世界に誘う華麗な衣装に再会したしかる後、佐保川の岸辺に立ち改めて家持の歌を口ずさみたい、というこれまでの心残りの1つが叶うのである。

そして、もう1つ、万葉集宣伝係としてやり残したこと、いや、どうしてもできなかったことがある。それは、宣伝係を自称しながら、万葉集を海外に向けて宣伝できなかったことである。

「日めくり万葉集」には、各界を代表する文化人の方々に、番組の選者として出演していただいたが、その数約160人。その内の約1割、15人が外国の方で、米、仏、英、中、韓、台湾、ブラジルの7カ国・地域にわたっている。日本文学の研究者に限られるのはやむを得ないところだが、他に著名人では仏のジャック・シラク元大統領や台湾の李登輝元総統など万葉集にとっても造詣が深かったと聞く。

「日めくり万葉集」の選者の1人で、日本文学研究の第一人者、故ドナルド・キーン氏は言う。「読む者にこれほど訴えかける力をもつ日本語の詩歌集は他にない。万葉集は、日本文学の至高の記念碑である」。

かくのごとく、万葉集は外国の方にも愛されてはいるのだが、海外のごく普通の人々にとってはどうか。万葉集について聞いても、「それ、何？」という答えが返ってくるだけだろう。この「日本文学の至高の記念碑」を知る市民はいない、というのが現実である。

選者の一人、イスラム学者の故片倉もとこ氏も言う。「万葉集は6世紀の頃に始まって、それが8世紀になって、20巻、4516首にまとめられたのだけれど、ちょうど、同じ6世紀頃、アラビアでは、あの有名な『アラビアン・ナイト～千一夜物語』が編集され始めて、そして8世紀ぐらいに完成したということになるのね。シルクロードの向こうとこちらで、まったく時を同じくして、2つの世界的な文学が花開いたということになるのだけれど、素晴らしいことだと思わない？ただ、世界中の人々に愛されている『アラビアン・ナイト』と違って、『万葉集』は海外に知られていないのがとても残念だけだね」。

古アラビアの物語のタイトルが、「数多い物語」の意の「千一夜」、わが国最古の歌集が、同じく「数多い歌」の意の「万葉」という符合もまた面白い。

そこで、「万葉集宣伝係」の出番となるのだが、国内向けには、2008年から12年まで、月から金曜の毎日放送したNHK「日めくり万葉集」、5分とはいえ、480本の番組は強力だった。その後、万葉集由来の新年号「令和」のおかげで、降ってわいたような万葉集ブームも起こった。

そして、海外向けということになるが、毎日放送する国際版「日めくり万葉集」は無理としても、特集番組のような形式で放送することは必ずしも不可能ではないだろう。しかし、海外にはまったく無名の万葉集の企画を通すのは並大抵ではない。それを実現する手がかりとして何かないかと考えたのが、「世界遺産」だった。正式には、「ユネスコ無形文化遺産」である。民俗文化財や口承伝統などの無形文化財を保護対象としたユネスコの事業の1つで、わが国からは、能楽などの古典芸能や和紙、和食など22件が登録されている。それに、万葉集を登録する運動の一環として海外向けの番組を制作したらどうかというのである。

そこで、真っ先に相談を持ちかけたのが、全国万葉故地サミットだった。全国の万葉にゆかりのある自治体が、万葉故地としての歴史文化遺産を末永く後世へ継承するため相互交流を行うことを目的とし、2年に1度各地に集い、サミットを開催しようというものである。その第1回が、平成28年に高岡万葉歴史館がある高岡市、第2回が多賀城市で開催されたが、第3回の奈良市からはコロナ禍もあり現在中止されている。そこで、発起人の一人、当時の高橋高岡市長と坂本館長を交えて話し合ったところ、同市長によると、「サミットでも世界遺産の話は出たが、登録となると10年がかりの運動になるので、組織的な検討の時間が必要」ということで、すぐには動けないとのことだった。万葉文化の拠点、奈良明日香村にある奈良万葉文化館も、「まずは、個人、団体など、有志が運動を盛り上げ、機が熟した段階で自治体など協議会を立ち上げたら」ということだった。文化庁や短歌協会などもほぼ同じだった。

ちょうどその頃、耳寄りな情報が入ってきた。俳句を世界遺産に登録する活動を始めるため、近々その協議会を発足させる」というのである。2017年4月のことである。そこで、早速協議会の会長に就任が予定されている、有馬朗人元文部大臣を、武蔵大学の学園長室に訪ね取材した。今は亡き有馬氏は、とても興味深い話で答えてくれたので、その時のメモをできるだけそのまま記す。

—俳句を、世界文化遺産に登録しようとした当初の経緯は？

最初は、中国の漢詩、朝鮮の時調じちやう（またはシジョ）、それに、短歌、俳句など、東アジアの短詩全体で登録を、と考えたが、海外はもとより、短歌はじめ、どこも乗り気でなかった。

—外国はともかく、短歌も乗り気ではなかった？それで、俳句で登録することになった？

そう、そこで俳句一本に絞ったところ、「奥の細道」に因んだ自治体に乗ってきた。それに、HAIKUが広く知られるようになり、岸田外務大臣（当時）が、前EU議長ファン・ロンパイ氏を俳句交流大使に任命したこともあり、より国際的、現代的な視点から登録推進することにした。その視点の核になるのが、「自然」。俳句は、原則季語があるので、必然的に自然を取り込むことになる。自然を詠うことで、地球環境や温暖化問

題と向き合うことができ、それを、世界遺産登録の基本的なコンセプトとしたい。

—「自然」を基本コンセプトとすると、万葉集はともかく、短歌は乗りにくいし、何より季語がない現代俳句もあるが？

そう、いろいろな考え方はあるが、俳句は、無季、無定型も認めることで一本化したところである。確かに短歌は、西行の例はあるが、古今集以降、特に現代短歌になると、そこが弱い。しかし、万葉集だけは別。恋の歌が多いが、万葉集は、“自然の発見者”だ。そこを接点に、短歌と連携することはできる。

いずれにしても、「万葉集と短歌」として連携して登録推進したいということであれば、そのような経緯もあり喜んで受け入れる。それぞれの協議会が登録推進を進めながら、いずれ大同団結して、「短詩型文学」として合流することにしたらどうか。

それからしばらく後の2017年4月24日、東京荒川区市民ホールで「俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会設立総会」が、約360人の参加のもと開かれ、私も会員として参加した。協議会には、俳句4協会と、委任状も含めて、30の自治体が加盟したことが報告された。

そして、記念講演会として、「俳句の力」をテーマに、5人の俳人が講演した。



「俳句には、自然の真実と文芸上の真実、両方がある」（金子兜太）、「自然を大切にすることは世界同じ、ただ理解には時間がかかる」（稲畑汀子）、「短歌にも声をかけた、自然の素晴らしさを表現し、世界を平和にしよう」（有馬朗人）。

金子兜太氏は、この翌年、次いで、有馬朗人氏、そして、つい最近、稲畑汀子氏が、世界遺産への登録を見ることなく、幽明境をこにされたのは残念なことだった。

これらの動きを受け、有馬氏が言う通り、俳句、短歌が大同団結し、「日本独自の短詩型文学」として世界遺産登録への道筋をつけねばならないだろう。ただ、それにあって俳句が設定した基本コンセプト「自然」は極めて意義があるにしても、大同団結の足かせになることは明らかだろう。その枠を取り払い、より大きな枠組みで、わが国の短詩型文学をとらえるべきではないか。

そこで、万葉集を原点に形づけられたわが国独自の短詩型文学の流れをしてみることにしよう。

7世紀から8世紀にかけて詠まれ、4500余首もの歌が収められた「万葉集」は、現存する日本最古の歌集であるのみならず、その歌数、作者数の多さにおいて世界最大のアンソロジーといえる。まさに日本文学の「至高の記念碑」(ドナルド・キーン)である。

「万葉集」で詠まれた短歌の形式は、それ以降「古今和歌集」をはじめとする勅撰和歌集などの歌集に

脈々と受け継がれ、明治以降は近代短歌として新たな展開を見せ、今日に至っている。上代に始まったとされる、和歌を披露し合う歌会始は、今もなお宮中や冷泉家において続けられている。

短歌と同じ五・七・五・七・七の音で構成し、社会風刺や皮肉、滑稽を盛り込んだ狂歌は、その言葉自体は平安時代から見られるが、独自の分野として江戸時代に発展した。

また、短歌から派生した連歌は、後に俳諧連歌を生み、その発句を独立させた俳句が生まれた。正岡子規は、芭蕉等が詠んだ発句を、「俳句」という近代文学として発展させ、現在では世界各国で HAIKU として盛んに詠まれていることは広く知られるところである。

俳句と同じ五・七・五の音で構成し、俳句が連歌の発句から生まれたのに対し、連歌の前句付けが独立したのが川柳である。狂歌と同じく、社会風刺や皮肉、滑稽を盛り込んだ川柳は、江戸中期、柄井川柳が始めたことから、以後川柳と呼ばれている。

これら狂歌や川柳を含めた、わが国独自の短歌と俳句は、その原点が『万葉集』であることは論を待たない。そこで、こうして受け継がれた貴重な歴史的遺産を次の世代に引き継ぎ、さらに広く世界の人々に知ってもらうため、世界文化遺産に登録することは、現代の私たちの使命であり、切なる願いである。

そこで、「万葉集から HAIKU に至る日本独自の短詩型文学～和歌、狂歌、俳句、川柳」と題して、世界文化遺産に登録申請するための趣意書を作成した。しかし、この大同団結は、一介の自称「万葉集宣伝係」にとってはあまりに荷が重く、その後まったく動きをとることができない状況にある。文化庁では、俳句の世界遺産登録申請を受けて、その後幅広い分野での検討が始まっていることは聞いている。

また、宮内庁は、前述した宮中の歌会始の天皇、皇后両陛下等の歌を、公式のホームページで英訳付きで紹介している。まずは、これを国内だけにとどまらず、「世界への窓」を開けて、海外に向けて発信することで、日本の伝統的な和歌、つまり短歌の魅力を世界の人々に伝えることにもなろう。

ちなみに、今年の歌会始の天皇陛下の歌とその英訳を紹介しよう。

【天皇陛下：御製】

「世界との 行き来難かる 世はつづき "窓"開く日を 偏に願ふ」

(As our contacts with the world remain difficult, I earnestly hope for a day when the window opens to the world)

次回は、「そして今、万葉を世界に」（その 2）として、万葉のふるさと奈良への旅の途中、万葉集を広く海外に知らしめようと、「世界への窓」を開けようとしている、京都在住のある外国人の日本文学者を訪ね、その話を伺うことにする。そして、旅の最後は、奈良万葉文化館がある明日香から橿原に出て、山辺の道を北上し、奈良は佐保川の岸辺で、家持と坂上郎女の「ある歌」をそれぞれ 1 首ずつ、現代風、つまり、ナウに読み替えて口ずさみ、「万葉集ナウ」を終えることにしたい。

いざ京都、そして、万葉のふるさと奈良の旅に、おんぼろマイカーで出発進行！

